

記憶の中のゴルフ場（アジア編）

吉田 真人

マニラ近郊のコース（フィリピン）

2002年、ICチップ製造用特殊フィルムの顧客を集めた技術説明会のため、マニラを訪問した。

先ず、代理店の社長の招待によるゴルフに行く。立派なコースで、池越えのホールが幾つかある。池のまわりには必ず若い衆が何人かいる。プレーヤーがミスショット「池ボチャ」をすると、争ってボールを拾いに飛び込む。このボールを幾つか纏めて販売するのである。家政婦として海外に勤務するという機会のない彼らには、貴重な小遣い稼ぎとなる。

セントーサ・ゴルフクラブ（シンガポール）

ファインシティー（きれい）と、罰金の2義語（²）のシンガポールに相応しく、この運営もストリクトだ。1980年代にビジターで行った時には、スタート前に練習場で試打をさせられ、漸くプレーが許された記憶がある。

2000年代には流石に試打制度はなかったが、スロープレーやバンカーならしが十分でなかったりすると（基本はセルフプレー）、すかさず会員宛にウオーニング・レターが届く。具体的・詳細に指摘してあり、度重な場合の罰則も書いてある。

コース自体は、たつぷりの距離と、熱帯地方特有の強い草の勢で、非常に難しい。18ホール廻ると、体内の水分が全て汗になってしまったのではないかと思える位だ。その後には飲むビールの味は格別ではあるが。

ジョホール・ゴルフ・アンド・カントリークラブ（マレーシア）

社内コンペには、ビジター数制限のないマレーシア迄出掛けた。ジョホールバル国境でのパスポートチェックは、車に乗ったまま出来るので便利だ。週末は混雑もなくほぼスムーズに通れる。

隣国に入ると、左右はアブラヤシの林で、パーム油産地に来たと実感する。15分程でゴルフ場に着き、朝食を摂る。ベーコンエッグを選び、口に入れる。「むむ？」何という味だ。ここはイスラム圏なので、ベーコンにもビーフを使う、まあ仕方がない。

ほんの少し走っただけで、全くの異文化体験が出来る。

（2023年7月27日）